

嶺井 巖 (いわお) さん

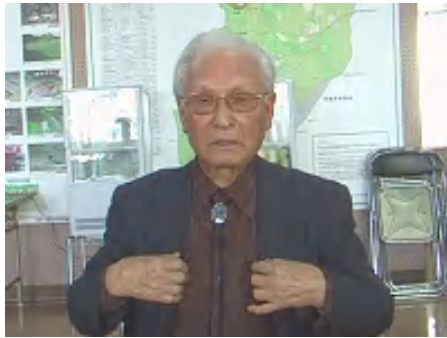
1925(大正14)年7月8日生まれ

当時の本籍地 沖縄県

陸軍

所属 独立混成第44旅団砲兵隊

戦地 西原、具志頭村(現八重瀬町)



●1945(昭和20)年3月1日 現役兵として独立混成第44旅団砲兵隊に入営

●1945(昭和20)年4月1日 米軍沖縄本島に上陸

●1945(昭和20)年5月 敵戦車邀撃隊として首里方面に移動

その時に私が何を持っていたかといいますと、急造爆雷というのがありますね、急造爆雷というのがあります、これは板の、こういったような板を使ってですね、約20センチ四方くらいの、立方くらいの、立方体の箱。この箱にいっぱいダイナマイトを詰め込んでですよ。ダイナマイトを詰め込んで、それで最後に上のほうに、信管をはめこんでるんです。これを叩けばダイナマイトが爆発する。このダイナマイトの破壊力たるや、あの時に私達の前にあらわれたのはM4という、アメリカのM4戦車というのは、大きなあの時の戦車だと思ったんですが、これを一発でぶっとおす位の爆破力があるダイナマイトなんですよ。これを急造爆雷、これを一人一人背負わされて、そして敵の戦車攻撃として首里方面に進攻しろと。

途中西原で島尻に向って避難して行く民間人と会った、その時に迫撃砲の砲弾を受けて、軍隊にいた私はすぐ匍匐、隠れるとこ、わかるさね。この人達はただ走って逃げるだけ。隠れるということでは住民わからないわけ。住民は籠に自分の子供を乗せて、これほっぽらして行くわけにはいかんもんだから、担いだまま走って行くんだから余計砲弾にあたる率が高くなる。そこで子供もろとも向こうにぶん投げて父親は即死。迫撃砲弾を受けてすぐ即死、道端にばったり。こういうふう倒れたのがもう道いっぱいですよ。

こういうふうね、日本軍がここは戦場になるんだから貴様たちは出て行け、出て行って、あんな形で道路を歩いていると迫撃砲でやられて死んでいく。で軍隊はその壕に入り込んで無事。そういったようなことを、私は移動の時に見届けてきました。もう前からそういうふう撃ち殺された人たちの死骸でしょうね。みな膨れかえって、ぶくぶくになって死んでる人たちが。その中を私達は踏んづけ踏んつけてこう、軍隊はあちら右往左往して、動き回って来たんだけど。ほんとにこの住民というのは、なんでしょっちゅう砲弾に晒されるような、外のほうに追い出されたのか。

軍隊はいったい、じゃあ壕を出たために、軍隊どれだけの住民を守ることが出来たか。守らない、逆なんですよ。そういうことでこの戦争というものは、沖縄の住民というものはあんなむごい殺され方をしていったんです。

これをね、私は一体誰がそれを知っているかなあと、見た人しかそれは言えないんですがね。あのような状態はね、おそらくあなたがたが今あんな状態を見せられた場合には、もう絶対見向きもできない、まずそこにおれない。悪臭はするしもうぶくぶくにふくれ上がって人間の形もしてない。ウジは湧いてるし。その中を踏み分け踏み分けかき分けかき分けして私達は移動しなければならぬような状態があったわけですがね。私は一軍人でしょ、だからもう言いようがないんですよ。私が軍隊を離れて助けんといかんかなあと思っても出来ないわけ。

●1945(昭和20)年6月13日 具志頭村(ぐしちゃん)の安里部落で負傷

島尻の土地をアメリカ軍が掃討する。もう穴と穴、壕という壕、人が隠れているなあというところを見つけたら、「デテコイ、デテコイ」といって出てこない者には手榴弾をぶちこんでいく。逃げるのが見つかった場合には機関銃でババババーッと撃ち殺す。「デテコイ、デテコイ」というのを聞いて、一緒にいた人は出て行ったわけですよ。私は動けんでしょう、もういよいよ最期。私達は手榴弾と言うのを2個ずつ渡されていました。敵と遭遇した場合には1発でもって相手を叩き潰して、そして最後に敵に囲まれてどうにもならない時はこれが自決用、ということで2個渡されていました。私はその1発を持っていましたので、もうこれが最期だと思ってしまった。

私を助けてここに連れて来た人は足が元気だから出て行ってアメリカ軍に捕まえられて、どっかで殺される。私はここで死のう。というふうには私は思ったわけです。だから手榴弾をはずしてね、信管をとめてるところのピンを抜いた、抜こうとした時に、この私を助けた人がまた舞い戻ってすぐ止められたんです。「なににするか貴様は！！」と押さえられて、そして助けられたんですがね。「敵は、アメリカは、殺しはしないよ僕らを。お前何考える。この手榴弾なにか！」といって手榴弾を取り上げられた。私はそれで自決せずにここで助かったわけですよ。

だけどもまだ助かったとは言えないね。敵につかまった場合には、いつどこでどんなことをされて、殺されるかわからんからということで私はまだ生き残ったということは感じなかった。(取材日:2013年2月4日)